TSUKU COMM【ツクコム】

TSUKUBA COMMUNICATIONS 2016 ▶▶▶

SPRING VOL. 31

対談

大学のブランディングと創造性

吉川 洋一郎 氏（作曲家・映像プロデューサー NPO法人 山海塾理事）×稲垣 敏之（筑波大学副学長・理事）

08 聴／中村伸夫 教授
10 OBOG／井上拓哉 氏
12 学内組織紹介／地球・人類共生科学研究機構
14 名物先生登場／青木伸生 教諭（附属小学校）
16 躍動する！筑波大生
18 Homeland／大韓民国
20 TOPICS
24 受賞・表彰
26 校友会・茗渓会
28 リレーエッセイ
30 新聞掲載・テレビ放送一覧
31 イベントカレンダー

筑波大学
University of Tsukuba

SPECIAL TALKING

対談

大学のブランディングと創造性

メッセージソング「IMAGINE THE FUTURE.～未来を想え」の大きな力。

本学のメッセージソング「IMAGINE THE FUTURE.～未来を想え」の作曲者、吉川洋一郎氏は、
世界中を飛び回る多忙な日々の合間を縫って、本学のブランディングにご尽力くださっています。
今回は、音楽をこよなく愛し、研究者として創造性を重要視してきた稲垣敏之副学長・理事が、
吉川氏と「本学のブランディング活動」や「センスの高め方」などについて語り合いました。

吉川 洋一郎 氏

作曲家・映像プロデューサー
NPO法人　山海塾理事

1957年　香川県　生まれ
1976年　筑波大学　第一学群自然学類　入学
在学中から「舞踏グループ山海塾」の活動に参加
以来30年間山海塾全作品の音楽制作を行う
1987年　NHKスペシャル「地球大紀行」の音楽を作曲
（JASRAC国際賞受賞）
他テレビ番組の音楽を多数手掛ける
2010年　筑波大学メッセージソング
「IMAGINE THE FUTURE.～未来を想え」　作曲

稲垣 敏之 副学長 理事

1952年　京都府 生まれ
1974年　京都大学工学部機械系学科　卒業
1979年　京都大学大学院工学研究科精密工学専攻単位取得退学
ヒューストン大学Post Doc　7月 工学博士(京都大学)
1980年　筑波大学電子・情報工学系講師
1987年　筑波大学電子・情報工学系助教授
1990-1991年　カッセル大学客員研究員（フンボルト財団）
1994年　筑波大学電子・情報工学系教授
2011年　筑波大学システム情報系教授
2012年　筑波大学大学院システム情報工学研究科長
2015年　筑波大学副学長・理事

稲垣：筑波大学のブランディングプロジェクトや、本学の自由科目「未来構想大学講座」の講師などで、いつも大変お世話になっております。吉川さんは、作曲家かつ映像プロデューサーとしてご活躍で、40年近く山海塾※の全ての作品に携わっていらっしゃいます。私にとって印象深い曲といえば、NHKスペシャル「地球大紀行」のメインテーマ『The Miracle Planet』があります。この曲は、1993年のJASRAC賞国際賞を受賞されましたね。

吉川：はい。その年に、世界で最も多く曲を使われた日本人の作曲家という賞をいただきました。

稲垣：「地球大紀行」の第一回放送の冒頭でこの曲が流れた時、「なんと素晴らしい」と感動したことをよく覚えています。この番組の音楽制作を全て担当されたそうですが、音楽は、番組のシーンに合わせてお作りになったのですか?

吉川：はい。毎月毎月送られてくるラッシュ（映像の試写）を見ながら、情景描写をより膨らませる曲を目指して作っていました。あの1年間は本当に大変でした。

稲垣：吉川さんは、第一学群自然学類のご出身だそうですね。ご専攻は何ですか?

吉川：地球科学です。筑波山の方の洞窟に入って地質を調べたりとか、海岸に行って化石を掘り起こしたりとか…。長靴を履いて、いろいろなところを調査したことを覚えています。

稲垣：「地球大紀行」とぴったりするところがありますね。

吉川：そうですね。番組には例えば「大地溝帯」など、毎回テーマがあるんですけど、それができるまでに何十万年もかかっているものだというような、テーマのバックボーンを理解して、非常に壮大なものだということを想定しながら音を選んだり、音が流れた時にどういうイメージを抱いてほしいかを意識して曲づくりしていました。大学で学んだことは、そういうことにとても役立ったと思います。

稲垣：どのような経緯で、音楽の道に進まれたのですか?

吉川：ピアノは3歳から始め、中学生の頃にはもう作曲をしていました。高校時代にはたぶん100曲以上作ったと思います。大学に入るとすぐに「筑波音楽協会」という軽音楽サークルに入って、趣味として楽しんでいたんですけれど、だんだん本格的になっていって…。そんな頃に、当時は、まだ舞踏の学生集団的なものだった山海塾の人たちと出会い、一緒に作品を作るようになりました。そうするうちに、その作品を見たテレビ局やレコード会社のディレクターからオファーが来るようになり、自然な流れで作曲家になったという感じです。

稲垣：作曲する時には、楽曲の様式に基づいてメロディーを創作するのですか?それとも、頭に浮かんだメロディーを様式に合わせて整えていくのですか?

吉川：僕が音楽をプロフェッショナルでやっていこうという時期と、コンピュータが音楽制作の現場で使われるようになった時期がちょうど同じでしたので、最初からコンピュータを使って作曲をしていました。家一軒買えるくらいの高価なもので、まだ日本に数台しかなかったオーストラリア製のフェアライトコンピュータという音楽用コンピュータをレンタルして使っていました。「地球大紀行」も、「まずフェアライトコンピュータでイメージを定着させ、NHKにプレゼンテーションをして、了承されたら、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団のメンバー達が演奏できるように譜面にする」という作業の繰り返しでした。

> 本学メッセージソング
> 「IMAGINE THE FUTURE.～未来を想え」

稲垣：筑波大学のメッセージソング「IMAGINE THE FUTURE.～未来を想え」を作曲していただいたことは、非常にありがたいことです。筑波大学は「新構想大学」です。キャンパスを囲む塀がない、誰でも自由に入れる社会に開かれた大学という形で登場し、いろいろな面で「開か

※山海塾：1975年に主宰・天児牛大によって創設された舞踏カンパニー。パリ市立劇場を創作活動の本拠地とし、ヨーロッパ、北米、中南米、アジア、オセアニアなど、世界45カ国のべ700都市以上でワールドツアーを行い、あらゆる文化圏で高い評価を得ている。

れた大学」を目指しています。開学当初から、学際性や国際性を重んじて、社会の中の問題を解決できるような人材を養成していこうというスローガンを持っていました。さらに最近は、先進性を重視して、「未来構想大学」というフレーズをよく使っています。常に社会の先導的役割を果たしていきたいということです。こういう姿勢であることを、学外の方にも理解していただくためには、筑波大学のブランディングが非常に重要な役割を果たしてきます。在学生の方や卒業生の方に、自分の在学している、あるいは、卒業した大学に対する誇りと愛着を持っていただくことにもつながりますしね。

吉川：そうですよね。

稲垣：メッセージソング「IMAGINE THE FUTURE.～未来を想え」は、本学のブランディングの大きな柱となっています。数々の有名キャッチコピーを生み出した人文学類OBのコピーライター、一倉宏さんの作詞に、吉川さんが素晴らしい曲を付けて下さいました。初公開になった、2011年度の入学式では、後に紅白歌手となったクリス・ハートさんに歌っていただいて、大変大きな反響がありましたね。

吉川：ものすごい反響でした。SNSやインターネット上で、「筑波大学の歌が格好いいぞ」「筑波大のこの歌は何だ?」というようなことがワーッと拡散しました。筑波大学のブランディングに関わって、最初の一歩の広まりを確信できた出来事でした。

稲垣：クリス・ハートさんも、吉川さんがご紹介くださったそうですね。

吉川：はい。ブランディングの話をしますと、一倉さんから、「筑波大学のブランディングをOBたちで手伝おう」と誘われ、クリエイティブな業界の第一線で働いている卒業生で、TSUKUBA BRANDING CREWSを結成しました。その活動の1つとして、メッセージソングを作ることになり、一倉さんから歌詞を受け取った後、「どういう情景で歌われるか」を一倉さんと話し合いながら作曲しました。一番多いのは、入学式、卒業式というような式典で、オーケストラをバックに歌うというシーンですよね。そして、「学園祭の後夜祭などで、学生たちが歌ってくれたらいいな」とか、「集まってお酒を飲んだりしている時に、自然にみんなで歌い出すような愛唱歌になると、もっといいよね」とか…。

稲垣：なるほど。

吉川：クリス・ハートさんは、知り合いのボイストレーナーに紹介してもらいました。当時は、まだデビューも決っていない、その方の生徒さんだったのですが、歌ってもらうと、驚くほど歌がうまかったのでお願いしました。

稲垣：あの曲は、前半と後半という大雑把な分け方をさせていただくと、その雰囲気が全く違うんですけれど、ずっとつながっているという雰囲気もあって。特に、オーケストラ版で、後にいくほど、雄大な景色が見えてくるような感じで、次第に勇壮な気持ちになってきますが、“Imagine the future”から“We shall go together”へ移ろうとするときのティンパニの連打が、「この一瞬に賭ける」という雰囲気があって、とても好きです。

吉川：2、3年前からですかね。式典の壇上

で「IMAGINE THE FUTURE.～未来を想え」を歌うと、客席の学生たちが立ち上がって、踊るようになりました。とても筑波大学らしいと思います。すごく自由。「式典だけど、ノリがいいぞ」みたいな。ああいう学生の反応は、とても嬉しいですね。昨年度の入学式で、メインで歌った女子学生は、自分の入学式の時に踊りながら「いつか私が壇上で歌う」と心に決めたそうです。それで、「私に歌わせてください」って名乗り出てくれたんです。

稲垣：そういう話を聞くと、嬉しくなりますね。今、IMAGINE THE FUTUREの意味をネット辞書で検索すると、1つ目に、「未来を想像しろという意味の英語」。2つ目に、「筑波大学のイメージソング」と、出てくるんですよ。

吉川：それはいいですね。

稲垣：ブランディングをする時に、すごくいいキャッチフレーズを作ったとしても、それを目で見るだけというより、音で聞いた方が、惹きつけられると思います。サウンドを使ったブランディングの重要性についてどのようにお考えですか?

吉川：僕は、コマーシャルの仕事もやりますが、広告の世界では、そういうサウンドブランディング、サウンドロゴといったものは、何十年も前から重視されています。30年以上前、象印マホービンがロゴを変える時に、コマーシャルの一番最後に、ゾウのマークを出すと同時に音を付けたいという依頼がありました。そのサウンドロゴは今も使い続けられています。

稲垣：サウンドブランディングを成功させるポイントというのはありますか?

吉川：音のオリジナリティと、短いフレーズで印象付けることが大切だと思います。「IMAGINE THE FUTURE.～未来を想え」の「イマジン ザ フューチャー♪」というところは、すごく頭に残るでしょう?それから、上に上がっていくメロディーラインというのは、飛翔感や発展的なイメージを与えることができます。この曲も、飛んでいくイメージのメロディーラインを意識して作曲しました。

OBOG指導による クリエイティブ体験講座

稲垣：吉川さんには、「創造学群表現学類―OBOG指導によるクリエイティブ体験講座」の講師もお願いしています。この科目は、未来志向型のグローバル人材の育成を目的に、全学の学生を対象として開講されている「IMAGINE THE FUTURE.未来構想講座」の1つで、TSUKUBA BRANDING CREWSの方々を中心に、クリエイティブ業界で活躍されているOBOGの方を講師として招いて、指導していただいています。本年度も、1回目が10月17、18日、2回目が11月14、15日に開催されました。

吉川：はい。毎年楽しみにしています。

稲垣：具体的には、どういうことをやっていただいているのでしょうか。

吉川：学生たちは、1回目で、講師たちからそれぞれの専門分野の講義を受けた後、アプリ、映像、ラジオCM、ポスターなど、講義を聞いて興味を持った分野を1つ決め、グループを作ります。そして、1ヶ月かけて筑波大学を広告する作品を制作し、2回目で発表会を行います。アウトプットとして、ポスターは、つくば駅や秋葉原駅に掲示しますし、ラジオCMは、ベイエフエムで放送されます。昨年は、そのラジオCMが、ACC（一般社団法人全日本シーエム放送連盟）のアンダー29を受賞しました。これは、広告のプロ達がエントリーした作品群の中から、特に優れていると選ばれたということです。

稲垣：本学のHP（www.tsukuba.ac.jp/about/videoclip.html）で聞くことができますが、本当に楽しいCMですね。

吉川：自分たちで指導していて、「筑波大学の学生はみんなセンスがいいな」と、いつも感心します。社会工学類とか生物学類とか、芸術専門学群じゃない学生たちが作ったポスターでも、驚くほどセンスがいいんですよ。「センス」は教えることができません。「センスをよくするためにどうしろ」という教育はできないんです。それだけに、いい感覚を持っている筑波大生って、格好いいなって思っています。

稲垣：芸術の学生だけがセンスがあるわけではなく、「筑波大のみんなが持っているんですよ」と言いたいですね。

吉川：僕は自然学類出身で、音楽をやっています。講師を担当してくださっているOBの中でも、電通のコピーライターの籠島康治さんや中村直史さん、エイ出版社の編集長、岩崎友彦さんも、自然学類出身です。二十歳くらいの段階では、将来、卒業してどういう分野の仕事に付くかは、全く未知数なんですね。ですから、こういった芸術的なカリキュラムを、全学の学生が受講できる筑波大学のシステムは

とても素晴らしいと思います。

稲垣：先ほど、センスを教えることはできないとおっしゃいましたが、私も似たような感覚があります。私は、できるだけ簡単な式を使って目の前の現象を表現する「数式モデリング」を行うことがありますが、どうやってこれを自分が身に着けてきたのかというのは、自分ではわからないし、学生に伝えることもできません。

吉川：それは作曲にもいえますね。以前、音楽大学で教えていたことがありますが、ピアノで伴奏をつけるといったテクニカルなところは指導できるのですけど、メロディーラインが浮かぶ瞬間は教えられない。ハッと浮かぶものなので、「なんで浮かぶのか」と自分で振り返って分析してもわかりません。そこを指導するというのは、ちょっと無理なのではないかと思います。

稲垣：そうなると、センスは天賦のものなのかというと、またそれも違うように思います。自分自身、「天賦の才があった」と思ったことはありません。「どうやって身に付けてきたのかはわからないけれど、最初は持っていなかったものが、いつの間にか身に付いていた」という感じがします。芸術にしろ、研究にしろ、もし、「自分のセンスをもう一段高めたい」と思っている学生がいたとすれば、どういうアドバイスをすればよろしいのでしょうか。

吉川：やはり、2種類あると思うんですよね。本当に生まれついての天才型の人で、誰も思い浮かばないようなものが、ポンポン出てくる方もいます。そうではなく、いろいろなものを見聞きし、勉強して、新しいものを知識として自分の中に入れつつ、年月をかけて自分の個性を磨き、センスを高めていくタイプの方もいます。

稲垣：自分自身を振り返ると、興味があるものに対して、納得できるところまで徹底的に考えてきたという感じがします。ひとりの人の中に、いろいろなものが入ってくると、その人の中で年月をかけて熟成されていくような気がしますね。

吉川：僕の肩書きは、一応作曲家と映像プロデューサーということになっています。映像に関して、最初は自分達の舞台作品をドキュメント的に、ビデオカメラで撮影していたんです。それがだんだん面白くなってきて、気がついたら、映像作品を自分でオーサリングして、全世界に発売するような作業をやるようになっていました。常に、新しい、刺激になるものに対してアンテナを張り巡らせていれば、新たな表現が出てくることもあると思います。

稲垣：創造性とか独創性とか言われると、「他の人と違うものを出さねばならない」という切迫したような感覚を持つ人もい

ますが、「あなたなりのものを元から持っているのだから、あるがままにしていれば、自然に出てきますよ」と言ってあげたくなります。
吉川：おっしゃるとおりですね。

グローバルに活躍するために

稲垣：ところで、最近、「グローバルな人材」というのが、いろいろなところで言われています。私の経験からしますと、海外の人たちと話していると、「日本ではこういう場面で、どういう風にするのですか?」「それはなぜですか?」と聞かれることがよくあります。私は理系なのですが、グローバルに活躍するためには、理系であろうと文系であろうと、単に幾つかの言語を操ることができるということではなく、日本の伝統や文化を正確に理解して、的確に相手に説明することができることが必要だと思っています。というのも、国や文化によって、感覚が全く違うことがよくあるからです。私が研究している車の自動運転は、人間がやるべきことを機械（ロボット）が代わりにやってくれるというシステムです。でも、ロボットが、「ここから先はできない」となったら、円滑に人間に権限を渡す。そういうシステムの開発に取り組んでいます。その根本には、「人間とロボットは、互いの能力を補い合う仲間」という考えがあります。ところが、国によっては、「ロボットは人間と敵対するもの」という考えをするんですね。日本には、鉄腕アトム以来、ロボットは人間の友達と考える文化がありますが、映画「アイ・ロボット」には、人間を攻撃するロボットが出てきます。そういうことが起きることが不思議でないと考える文化を持っている人たちもいるわけです。ですから、グローバルに活躍するためには、自分たちがどう考えるか、そして、なぜそういう考えに至ったのかを、正確に、相手の言語で説明できることが大事なのではないかと思うのです。吉川さんは、世界中で山海塾の公演活動をされています。その拠点は、コンテンポラリーダンスの世界最高峰である、パリ市立劇場だそうですが、フランスの文化などを背景において、それに合うように表現されているのでしょうか?
吉川：それがここ数十年間の大きな問題でした。具体的に言いますと、我々の作品の中で、ダンサーが立ち上がって踊っていたものが、バタンと倒れて、それからもう一度、ふわぁーっと身体を浮き上がらせるというような踊りを見たフランス人から、「あれは復活のシーンですか?」と聞かれたりします。フランスはクリスチャンの国ですから。世界中を公演して回りますと、いろいろな宗教観の方や、文化の背景が全く違う方々がいて、それぞれ違う感想を持ちます。我々が全く予期しない解釈をされることもよくあります。
稲垣：その問題をどのように解決されたのですか?
吉川：数十年間、全世界の人の中で公演してきて、「観客の方々に解釈を委ねる」という結論に達しました。芸術作品だから許されることかもしれませんが…。宗教観も文化的背景もお互い全く違うということを認識した上で、言葉にはできない部分の、すごく深い部分でお互いに響きあうものを表現しよう、というような作品の作り方になってきました。
稲垣：すごくいいお話を伺いました。例えば、外国で作られた音楽でも、昔から知っているような、親しみを感じることがあります。絵にしても、どこがいいかとか、言葉で説明できないもので、共鳴してしまうものがあります。あれは、自分の昔からの体験の中で、何か近いようなものがあった場合に、そういうようなものを感じるのでしょうか?
吉川：23歳の頃でしたか、生まれて初めてパリに行った最初の夜に、みんなで黒澤明監督の『生きる』という映画を観に行きました。驚いたことに、フランス人も、僕らと同じところで泣くんです。最後の、歌を歌いながらブランコに揺られているシーンで、もう、おいおい泣くんですよ。その時、「こういう悲しいという心は全世界共通のものなんだな」と実感しました。「人生のはかなさ」というような根源的な感情は、国や文化による違いのない共通項なのです。

留学生と積極的に交流して グローバルなネットワーク作りを

稲垣：吉川さんには、講師だけでなく、式典の歌の指導などもお願いしています。たくさんの筑波大生と接する中で、日頃からいろいろなことを感じられていると思いますので、筑波大生に伝えたいことや期待したいことなどのメッセージをお願いします。
吉川：学生時代に、アメリカから来た留学生と友達になり、今でも交流が続いています。今は昔よりもっとたくさんの留学生がいるのだから、ぜひ、積極的に交流してほしいですね。今僕は、地球一周できるくらい、各地にいろいろな友達がいます。筑波大学を拠点として、こういうグローバルなネットワークを作っていってほしいなと思います。
稲垣：本学では、現在、100を越える国や地域からの留学生が学んでいます。学群で学んでいる留学生が500人くらい、大学院で学んでいる留学生が2000人くらいいます。ですから、積極的に彼らと交流すれば、地球一周できるネットワークを作ることも十分可能だと思います。
吉川：それから、学生に、「筑波大学の広告をしなさい」という課題を出すと、「陸の孤島」といったネガティブなことをつらつらと上げてくるのですけれど、つくばエクスプレスもできて、筑波大学のイメージはかなり変わってきています。「非常にセンスがいい」とか、「格好いい」などと周りから見られるようになってきているんですよ。もっと、自分たちの大学に自信を持ってもらいたいですね。
稲垣：いいお話をたくさん伺いました。どうもありがとうございました。
吉川：最後にもう一言よろしいでしょうか。今、新しい表現がどんどん出てきています。例えば、「クリーンバンディット」というケンブリッジ大学出身の学生バンドは、エレクトロニクスとクラッシックを掛け合わせた全く新しいジャンルを作り出し、SNSやユーチューブを使って世界的に活躍するようになりました。そういう新しいメディアを使った、新しい手法の音楽を筑波大学の学生でやる人が出てきたらいいなと思っていますし、もし、そういうグループがあったらぜひプロデュースしたいので、ご連絡ください。一緒に、新しい時代を作りましょう!

「一片の花飛んで春を滅却す」

花が散るごとに春が過ぎ去ってしまう悲しさをセンチメンタルに詠んだ、唐の詩人 杜甫の詩句を隷書体で書いた作品

PROFILE

中村 伸夫 教授（芸術系）

1955年　福井県生まれ
1978年　東京教育大学教育学部　芸術学科　卒業
1982年　筑波大学大学院修士課程芸術研究科　修了
1988年　筑波大学芸術学系講師
2006年　筑波大学大学院人間総合科学研究科教授

■グローバル時代の中の伝統文化

1976年に日中間の国交が回復した3年後、大学院生だった頃に2年間、国費留学生として北京で過ごしました。厳しい自然環境や貧しい暮らしの中で培われた中国の人々の逞しさや文化、そして文字に対する姿勢を目の当たりにし、衝撃を受けました。その経験は、書や文字への理解を大いに深めました。

日本には、小中学校の国語科の一部として正しく字を書くための「習字」があり、それが高校では「書道」となって芸術科の中に位置づけられます。さらに書は漢字文化圏特有の伝統文化という側面も持っており、この多面性が、日本人にさえも書をわかりにくくする一因になっています。

そのような中で、日本文化を世界に発信する活動が盛んに行われ、茶道や華道、歌舞伎などは海外でも知られるようになりました。書も、徐々に紹介される機会が増えています。筆で文字を書くこと自体、いかにも東洋的なパフォーマンスで、書かれた文字も不思議な造形として受け止められます。それだけでももちろん意義はありますが、その先にある本質的な書の面白さ、文字の意味と造形の表現を一体のものとして鑑賞するには、それなりの知識が必要です。中国留学の経験があるからこそ、グローバル時代にあって正しく文化を伝えていくことの重要性も感じています。

■自分の発見

昨年9月に完成した睡眠医科学研究棟のロビーの、幅8mのガラス壁面一面にほどこされた篆書体の作品。「心地よく眠っていると蝶になった夢をみたが、自分が蝶になったのか、それともともと蝶であった自分が人間になっていたのか…。」という、「胡蝶の夢」として知られる荘子の故事が題材です。14枚の紙に分け、数日間かけて書き上げました。これだけの大作を制作することも稀ですが、多くの人の目に触れ、永く残る作品を存分に創作できたのは、何にも増して嬉しいことです。

書は一発勝負の芸術です。いったん書き始めたら途中で修正はできません。うまくいかなければ、紙ごと換えて仕切り直し。潔いとはいえ、その度に精神のリセットを要するとてもナイーブな営みです。実際に筆を持つのは数分程度のことですが、そこに至るまでには入念な準備があります。書くべき文字を選び、それぞれの文字について資料を徹底的に調べ、鉛筆で何度もデッサンを重ねて、全体のイメージを固めます。けれども実際に作品を作り上げるカギになるのは、むしろ文字の周りに生まれる空間、いわゆる「間」です。書は、字の上手い、下手ではありません。筆を動かす瞬間の緊張感や余白の響き合いを捉え、文字の造形によって、本当のところは何もわからない自分というものを発見する。それが、文字を書くことの醍醐味です。

聴

漢字の書を学問する 筆文字の造形追求による自己の発見

中村 伸夫 教授（芸術系）

筑波大学は、東京教育大学以来、芸術としての「書」の専攻コースを有する国内で唯一の大学です。その点では、書は特殊な領域かもしれませんが、文字の成り立ちを学び、筆で文字を書くことは、日本の伝統や文化の基盤の一つでもあります。紀元前のはるか昔に作られ、変化しながらも脈々と伝えられてきた、何千にも及ぶ漢字や書の歴史を探究し、同時に、一人の書家として、文字と向き合い、作品制作に臨んでいます。

■原始的な文字の魅力

漢字の始まりは、今から3000年以上も前に中国で誕生した甲骨文字です。この時すでに、現在解読されているものだけでも、2000字以上の漢字があり、占いなどに使われていました。常用漢字が2000字あまりですから、数だけ見れば、ほぼ同じです。しかし、その書き方、書体はダイナミックに変化しました。現在、私たちが使っている楷書体になるまでに、篆書（てんしょ）、隷書（れいしょ）、行書、草書、といくつもの書体を経ています。

特に関心があるのは、文字の源流が見える篆書体。文字という大発明を成し遂げた人々の苦労が現れています。博士論文で研究した、中国の戦国時代の貴族の墓から発掘された棺の中に入っていた730本もの竹簡には、老子の写本が書かれていました。その筆跡を調べていくと、6人あるいは7人で分担して書いていたことがわかりました。わずか7㍉ほどの細い竹簡に筆で文字を書く緻密な技術は驚くべきものですが、当時から、整然と書く人も、殴り書きのような人もいました。筆は、鉛筆やボールペンとは比較にならないほど書き方の自由度が高く、とりわけ悪筆にこそ書いた人の真の姿が表れます。

■謎の多い書の歴史

楷書を崩したものが行書や草書、つまり草書が最も新しい書体だと考える人は多いのではないでしょうか。確かに、かつてはそれが定説でした。ところが、大英博物館などに所蔵されていた史料の中から、紙が発明される前の時代に草書で書かれた木簡が見つかりました。隷書が正式な文字だった頃に、その崩し字としての草書が存在していたわけです。西欧の学者が文化財として中国から持ち帰ったものですが、分析してみると文字の変遷という重要な発見をもたらしました。

ところで、文字を書く技術はどのようにして今日まで伝えられてきたのでしょうか。考えてみるととても不思議ですが、それについて記述された史料はほとんどありません。文字を学ぶことはあまりにも当たり前で、記録するまでもないことだったのでしょう。石碑などに彫られた文字を石刷りして写し取ったという記録が、6世紀ごろの文献にかろうじて出てきます。しかし例えば、その数世紀前に活躍した中国の書家、王羲之。作品は残っていても、こういった人たちがいかにして書を学んだのかは、全く謎に包まれており、目下最大の研究テーマです。

睡眠医科学研究棟のロビー

TAKUYA INOUE

TSUKUBA

OBOG

学生時代はヒップホップに熱中し、学生日本一に輝いたという井上拓哉さん。その情熱をおもちゃに注ぎ、JR東海のリニア中央新幹線開通に先んじて、磁力による浮上と走行を実現したミニチュアリニアモーターカーを開発しました。

PROFILE

井上 拓哉 氏

タカラトミー ニュートイ企画部
企画開発課係長

1980年　兵庫県　生まれ
2000年　筑波大学芸術専門学群入学
2005年　筑波大学芸術専門学群デザイン専攻 卒業
　　タカラトミー（当時：タカラ）入社
2011年　プラレール アドバンス発売　グッドデザイン賞 受賞
2013年　アニア発売
　　「日本おもちゃ大賞2013」共遊玩具部門大賞受賞
2015年　リニアライナー発売
　　「日本おもちゃ大賞2015」イノベイティブ・トイ部門大賞受賞

— まずは、筑波大学進学の理由から教えてください。

高校で陸上部に入っていて、筑波大学出身の顧問の先生から進学先として勧められました。その時初めて、筑波大学が総合大学で、いろんな選択肢があることを知ったんです。最初は体育専門学群を目指していましたが、絵を描くことも好きだったので、途中から芸術専門学群もいいなと思うようになって。現役の時には落ちてしまったので、芸術の予備校に1年間通い、芸術専門学群を受験しました。

— 体育専門学群と芸術専門学群を迷うとは、多才ですね。

大学ではヒップホップに熱中しすぎて、学業をおろそかにした時期もありました。卒業まで5年かかっています（笑）。「Real Jam」というストリートダンスのサークルで、「STACK' S」というチームを組んでいました。追越宿舎の食堂のガラスに映しながら、毎日、夜10時から夜中3時くらいまで練習をしていましたね。学生のダンスコンテストBIG BANG !! TOKYO第1回大会で優勝したり、プロのダンサーも競う「JAPAN DANCE DELIGHT」の予選を勝ち抜いて、全国大会に出場したりしました。メンバーのリーダー的な存在だった阿知和真吾さんは、今や日本のトップダンサーですし、岸田力さんもダンスの指導者として活躍されています。

— 井上さんは、おもちゃの会社で働く道を選んだのですね。

小さい時からずっとおもちゃが大好きで、子どもの頃は食玩を集めていました。ヒップホップにはまっていた頃も、荒川沖にあった「トイザらス」に毎週のように通って、バイト代のほとんどをおもちゃに費やしていましたね。特にフィギュアが好きで、アパートの壁一面に飾っていたので、親や友達が来るとびっくりしていました（笑）。卒論のテーマは「食玩」。就職活動の時にも「食玩を担当したい」と伝えたので、タカラトミー（当時：タカラ）に入社して最初に配属されたのは食玩の部門でした。入って1ヶ月で当時トミーとの合併が決まって、すぐにプラレールの部門に異動になりましたけど（笑）。

— 卒論が就職に役立ったのですね。

それもあるでしょうし、ポートフォリオ（自己作品集）も出しましたが、私としては、「（ダンスの）チームで協力し合ってチャンピオンになったことで得たものについて」や、「その情熱を今度は御社に」というようなことを強くアピールしたのが良かったのではないかと思います。

— プラレールの部門に配属されていかがでしたか？

プラレールは、57年以上続くブランドで、商品もマーケティング手法もほとんど固定しているので、3～4年は勉強させてもらっているという感じでした。それでも、「何とかイノベーションが起こせないか」と考え、2009年に、「既存のプラレールのレール2本を揃えて走らせる大きな電車で、車両が変形するようなおもちゃを開発したい」と当時の部長に提案してみました。これが、その時に見せたアイデアノートの走り描きと、製品化した「グランドガイナー」のイラストです。そして、「グランドガイナー」の発売後、「2倍ができたのだから、1/2ができないか」と考えて開発したのが、1本のレールに2つの車両を走らせる「プラレール アドバンス」です。「プラレール アドバンス」は、プラレール卒業後の子どもたちの心を掴んで、ヒット商品になりました。企画とシ

※リニアライナー
磁力で浮上し、磁力の反発を使って走る世界初の量産型ミニチュアリニアモーターカー。コントロールステーションでは、スケールスピードの表示や音声案内を行う。「リニアライナー　超電導リニアL0系スペシャルセット」希望小売価格35,000円（税抜き）
2015年日本おもちゃ大賞受賞

ステムをトータルでひとつのデザインとして評価していただき、2011年度のグッド デザイン賞を受賞したのも嬉しかったですね。その後、ニュートイ企画部に異動し、プラレール、トミカ、リカちゃんに続く定番商品を作るというプロジェクトの立ち上げをやらせていただきました。そこで開発したのが、動物のフィギュア「アニア」※です。アニアの販促キャンペーンで「アニア体操」というダンスのDVDコンテンツを作った時には、インストラクターを雇わず、ダンスの経験を生かして、自ら出演しました。楽しかったし、経費も浮きました（笑）。

※アニア（アニマル　アドベンチャー）

動かして遊べる手のひらサイズの動物フィギュア。2013年6月発売。発売から2年半で累計出荷数200万個突破というヒット商品。現在、日本を含む13の国と地域で、累計66種類を展開している。動物のリアルさを損なわない程度にデフォルメしながらも、可動と動物の足の裏に至るまでこだわった繊細なつくりが特長。動物シリーズは、メーカー希望小売価格600円（税抜き）。
2013年日本おもちゃ大賞受賞

— そしていよいよ、世界初の量産型ミニチュアリニアモーターカー、リニアライナー※の開発に取り掛かったわけですね。

はい。2014年6月のおもちゃショーで、研究開発の部門が、リニアライナーのコンセプトモデルを参考展示したところ、非常に反響が大きかったので、発売に向けて商品化を担当するニュートイ企画部が開発を引き継ぎました。その時点では2両編成でしたが、JR東海のリニア新幹線のミニチュアとなると、最低でも4両編成にしなければならないなど、商品化には、問題が山積していました。リニアライナーの開発は、世の中に参考になるものが全くないので、本当に大変でしたね。

— 実際に走るところを拝見しましたが、想像を超えたスピード感となめらかな走りにびっくりしました。車両を上から押すと、沈みますね。ちょっと押し返される感覚がして、磁力を感じます。

約2ミリ浮いています。これ以下だと、浮いていることが実感できないし、これ以上浮くと、磁力が弱くなるので、遅くなってしまいます。スケールスピードというのですが、実際の大きさで換算した時に、時速500キロが出ていないと、リニアモーターカーのおもちゃとはいえません。最初はどうしても300キロくらいしかスピードが出なくて…。浮上と推進のバランスの調整に苦労しました。

— 大変なことも多いと思いますが、仕事をしていて一番嬉しい時は、どんな時ですか？

おもちゃショーなどのブースで、私の開発したおもちゃに興奮している子どもを見ると、すごく嬉しいですね。興奮してテンションが上がって、飛び跳ねていたりするんですよ（笑）。リニアライナーは、年配の方からの注目も高くて、「リニアモーターカーという仕組みを実現していることに感動した」などと声をかけていただいたことも嬉しかったです。

— どんなことを心掛けて、おもちゃを開発していますか？

自分が作りたいものを作るというより、届く人が楽しいかどうかを追求する姿勢を大切にしたいなと思っています。

— 最後に、本学の学生にメッセージをお願いします。

学業をしっかりすることも、将来につながっていくとは思うのですけれど、そうではないサークル活動や趣味、バイトなども、つなげようと思えばいくらでも将来につながっていくものです。私の場合は、陸上をやっていたことがダンスにつながりましたし、ダンスのエンターテイメント性は、デザインの仕事に生きています。時間と体力のある学生時代に、いろいろなことに思い切り挑戦してほしいですね。それから、卒業してから実感したのが、筑波大学は、非常に素晴らしい環境だったということです。いろいろな学群の人たちがいて、いい刺激を受けますし、先生方もすごいですし。私も学生の頃には分かっていませんでしたけれど、学生さんたちには、ぜひ、その素晴らしさを心に留めながら過ごしていただきたいなと思います。

学内組織紹介

筑波キャンパスは、東西約1km、南北約4kmの広大なキャンパス（東京ディズニーリゾートの面積の約2.4倍）です。広いキャンパスにはさまざまな教育・研究組織があります。その組織や施設がどのように設置され、どのようなことをしているかを紹介いたします。

地球・人類共生科学研究機構

Institute of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba

Introduce

研究力強化の一環として2014年に設置された地球・人類共生科学研究機構には、筑波大学の強みの一つである生命科学・環境科学分野の研究が集約されています。発足間もない組織ながら、この分野における世界トップレベルの研究拠点となるべく、基礎研究から国際産学連携も含めた社会実装までを視野に入れた、本学ならではのユニークな研究活動が進められています。

松本 宏 機構長

「オール生命環境系」の旗印に

「生命科学、生物資源科学、環境科学、さらに文系も含めた文理融合智を結集し、地球と人類の持続可能な社会の構築に貢献する」という大きな目的を掲げた地球・人類共生科学研究機構。生物の発生や系統分類から地球環境まで、幅広い研究領域をカバーする本学生命環境系の力をもってすれば、決して大げさな目的ではありません。

この機構は、筑波大学の研究力強化実現構想の中で、本学の得意分野をより強化するために設置された3つの学術拠点のうちの一つです。設立にあたって、基礎研究を行う生命圏科学学術センターと、社会還元型研究を推進する生命環境開発研究センターが新設され、既存のアイソトープ環境動態研究センターを構成する生命環境系教員で作る組織を加えた３つを束ねる形で構成されています。基礎研究の成果を社会実装に結び付けることを意識し、世界トップレベルの研究拠点を目指してオール生命環境系で取り組む姿勢があらわれています。

また、災害時の人々の行動や心理、都市計画、創薬なども、期待されるアウトプットには欠かせない研究分野です。生命環境の枠にとらわれず、学内の智を総合的に活用していく研究体制を整えようとしています。

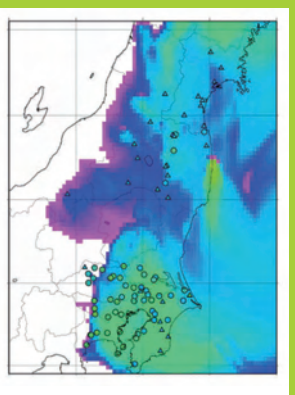
大型プロジェクトで進める基礎研究

生命圏科学学術センターでは、生命の発生と分類を探る「生命の樹プロジェクト」と微生物の役割や相互作用を究明する「集団微生物制御プロジェクト」などの大型プロジェクトが進められています。

「生命の樹プロジェクト」は、2014年度に数理物質系や連携大学院も含めた部局横断型のリサーチユニットに認定された「生命の樹」をベースにしたプロジェクトです。生物の進化を表す系統樹の幹となる生命原理を探究する、非常に根源的な研究です。このような研究では一般に、モデル生物（マウスや線虫など遺伝子配列が完全に解読されているもの）を対象にします。しかし現実の生物系は多様な生物で構成されており、モデル生物だけでは十分に説明ができません。非モデル生物についてもデータを集め、生命の樹の太い幹の本質に迫ろうとしています。

科学技術振興機構の創造科学技術推進事業（ERATO）に採択され、2016年度から本格的に始動する「集団微生物制御プロジェクト」は、集団としての微生物の働きを調べるものです。カビやバクテリア、ウィルスなどの微生物には個々に、化合物を産生したり分解したりする特有の代謝機能があります。実際には、いろいろな微生物が集団（バイオフィルム）となって社会が形成され、その中で果たす役割や相互作用があります。そのような集団の構成員としての微生物の機能や形成メカニズムを解明していきます。

全生物の系統樹（生命の樹）



モデルによる放射線物質の輸送再現

国際アドバイザリーボードでの報告

形が見えてきた応用研究

本学発の生命環境分野の応用研究としては、藻類バイオマスやトマトの品種改良がよく知られています。エネルギーや食糧といった重要課題の解決に資するものとして、世界的にも注目される研究です。いずれも、生命環境開発研究センターに属するテーマですが、前者はすでに企業からの出資を受け、機構から独立した研究体制となっており、商品化に至った成果も産み出しました。後者も、受粉なしで実をつける品種や、甘みを増した品種などが開発され、実験室レベルでの研究から実用化に向けた産学連携が進められています。

アイソトープ環境動態研究センターは、東日本大震災後、研究の方向性が一変しました。生命環境系でもともと行っていたのは土壌中の放射性物質の動きから土砂の移動や地形の変化を追う研究。1950～60年代に欧米や旧ソ連が実施した大気中核実験に由来する放射性物質が今も土の中に残っており、それを特定し追跡していました。そこで培われた微量分析技術が、震災後に役立つこととなりました。現在は、原発事故により放出された放射性物質の、環境中での移動メカニズムの解明や除染技術の開発がメインテーマです。IAEA（国際原子力機関）との連携や、放射性物質に関するリスクコミュニケーションにも取り組み、この分野の主導的役割を果たしています。

共通の研究基盤づくりに向けて

機構には国際アドバイザリーボードが設置されており、運営主体となる研究戦略会議に対して、毎年、評価と助言を行います。メンバーには各分野で活躍する国内外の第一人者が名を連ねています。学内にある数多くの研究組織の中でも、このような定期的に外部評価を受ける体制を設けているのは珍しい例です。

昨年12月に最初の評価があり、運営全般としては良い評価が得られた反面、発展性のある基礎研究の在り方や組織のまとまりについては、もう一段の検討が必要との指摘を受けました。機構内ではセミナーなどを通じて、基礎研究と応用研究の交流を図ろうとしていますが、これらはストレートに結びつくわけではありません。「非常に専門性の高いそれぞれの研究から、共通の基盤となる技術や情報を集約、共有することで、研究テーマ間に横ぐしを通したい」と松本機構長は語ります。

最新の解析技術を駆使して、遺伝子、タンパク質、代謝物などさまざまなレベルで生物を網羅的に解析した基礎データは、微生物を用いた環境浄化や創薬など、実効性ある社会還元につながることが期待されます。しっかりとした基礎研究を中心に据えることで、応用研究の幅を広げ、新しい社会還元の出口が次々と創出されていくような拠点となるべく、これからが機構の本領発揮です。

附属学校の

名物先生登場！

VOL. 21

本学には11の附属学校があります。それぞれの分野でわが国の教育をリードしており、全国でも有名な先生たちが大勢います。各学校で活躍する名物先生を紹介いたします。

青木 伸生（あおき のぶお） 教諭

筑波大学附属小学校

1965年千葉県生まれ。東京学芸大学卒業後、東京都江東区内の小学校教諭となる。1993年より筑波大学附属小学校に赴任し、現在に至る。その間、担任および他の学年の国語の授業を担当。趣味はドライブと生き物飼育、飛行機の中で落語を聞くこと。

教材は「鬼ごっこ」のいろいろな遊び方について書かれた１枚のプリント。「どんな遊び方があるか」と「なぜそのような遊び方をするのか」、それぞれ白と黄色の紙に書かれ、黒板に貼られた２つの問いを手掛かりに、段落ごとに内容を確かめ、それらの関連を探していきます。そわそわしている子どももいて、教室の中はなんとなくざわついていますが、青木先生が質問を発すると、一斉に元気よく手が挙がります。

誰かが発言をすると、そこからさらに問いを広げながら授業は進んでいきます。中には、自分の考えを的確に表現しきれていなかったり、２年生にしては難しい単語が飛び出すこともあります。そんなときは、その内容を別の言葉で言い換えられる人を募ったり、隣同士で話し合ったりします。積極的に発言することと同じように、互いの発言に耳を傾けることも求められる活動です。そうして、一人の考えやひらめきを、先生がくみ取って代弁するのではなく、みんなで理解できるように導きます。国語は他の教科に比べて起伏のつけにくい教科だからこそ、能動的に参加する学びを意識しています。

青木先生は、自ら問題意識を持って読み書きのできる子どもを育てたいと考えています。物語も説明文も基本は「謎解き」。単にストーリーを追ったり、内容を要約するのではなく、登場人物の背景や、伏線を理解して、明示されないそれらのつながりを見つけるのが文章を読む楽しさです。そのために、場面や段落で細切れにせず、文章全体を丸ごと捉えることを心掛けています。語彙を増やしたり、文章の流れを把握するために、教科書や各自が選んだ文章の「書き写し」も重視しています。このような、読むことと書くことを融合した体系的な学びを通して、子どもたちは論の展開や物語の構造を把握できるようになり、さらには説明文や物語の創作へと発展します。

それが具体化した活動の一つが「詩のボクシング」。もう10年以上も取り組んでいます。ボクシングと言っても殴り合うわけではありません。赤コーナーと青コーナーに分かれて対戦形式で行う、詩の朗読発表会です。米国で始まったもので、1990年代後半に日本に紹介されました。出場者はそれぞれ自作の詩を朗読し、子どもたちの中から選んだジャッジ（審判）の多数決で勝敗を判定します。中学や高校では学校対決などもありますが、小学校での取り組みは珍しく、文化交流を進めるケネディ駐日米大使が関心を持ち、昨年6月に附属小・中学校の代表者が米国大使館に招かれ

て日米対決が開催されました。同時通訳を介し、詩人などがジャッジとして参加しました。団体戦では僅差で米国に敗れたものの、ジャッジが入ることで子どもたちのモチベーションも上がります。詩の創作というと、ハードルが高そうなイメージですが、スタイルは何でもあり。日常の些細なことも題材になるので、慣れると意外と気軽に書けるそうです。高学年では、代表選考予選会を兼ねた授業も行っています。結果はともかく、いろいろな感想ももらえるので、負けたとしても、子どもたちにとって一方的なダメージにはなりません。次回は韓国も加わって3カ国対決が計画されています。

鬼ごっこの説明文は、4段落目まで読み進みました。とても平易に書かれた文章ですが、鬼の視点や逃げる人の視点からルールを考えてみると、いつも遊んでいる鬼ごっこにも、ゲームをより楽しむためのさまざまな仕掛けが隠されていることが分かってきます。それらが段落ごとに白と黄色の紙に書き分けられて黒板に並べられました。それらをよーく眺めると・・・最初の2つの問いに対する答えとして、きちんと色分けができています。つまり、文章全体が問いを軸にして展開されており、遊び方の事例を紹介する形で答えが示されるという構成になっているのです。説明文の設計図を発見したような驚きが授業を締めくくります。

子どもたちはそれから板書をノートに書き写します。カラフルなペンを使って、黒板上に現れたこの説明文の構成を、思い思いのデザインでなぞっていきます。縦書きで右から左へ、という典型的な国語の板書ではなく、上から下へ、中心から外側へという配置や、色使いを工夫して、視覚的に思考を整理できるようなアイデアが詰まった黒板です。

授業が終わると、子どもたちは誰ともなく青木先生の周りに集まってきます。ノートを見せに来る子、気付いたことを話しに来る子、ただただ先生の手足にまとわりつく子。いわゆる「熱血」というタイプではなく、むしろ淡々と子どもに接しているように見える青木先生ですが、クラス全員で学びを深め成長していこうとする率直な姿勢が、子どもたちに信頼感や安心感をもたらしていることが伝わってくる光景です。

国語は、大人になって振り返ると捉えどころのない印象もありますが、思考やコミュニケーションに不可欠な「言葉」を身につける大切な教科。人は、言葉に救われたり、励まされたりする一方、言葉で誰かを傷つけてしまうこともあります。そんな言葉の持つ力を感じてほしい。学生時代から小学校の国語の先生を目指し、一筋に歩んできた青木先生の授業には、その思いが貫かれています。

森田 和良 副校長

本校に23年在職するベテラン国語科教師の青木先生は、常に冷静で落ち着いた授業をします。急遽、全校児童の前で話をすることになったときでも、何事もなかったように落ち着いて舞台に上がり、落語を披露してくれました。物事に動じない先生です。

授業も斬新です。国内で初めて国語授業に「詩のボクシング」を取り入れ、子どもたちの発想力、対応力、表現力を鍛えました。さらに、総合活動では落語に取り組み、伝統文化の体験とともに言葉の感覚も鍛えています。

飼育には強いこだわりがあるようです。教室には、自前で1m級の大水槽を設置し熱帯魚を飼っていたり、50cmほどの陸ガメやイグアナも飼育したりしていました。動じない冷静さと深い愛情を兼ね備えた、すてきな先生です。

高橋 健太郎選手

躍動する!

「インカレ優勝」を心に期す
日本男子バレーボール界のホープ

2015年4月、男子バレーボール日本代表監督が、「次世代の日本代表の中心選手4人をNEXT4と命名する」と、異例のユニット結成を発表した。人気低迷に悩む男子バレー界を盛り上げるために結成されたユニットは、その狙い通りに大ブレイク。男子バレー人気復活の立役者となった。その1人、高橋健太郎選手（体育専門学群3年）もメディアに追われる日々だ。

「僕はけっこう目立ちたがり屋なので、最初は嬉しかったんですけれど、だんだん、『期待以上の結果を残さなきゃ』というプレッシャーの方が大きくなってきました」。ユニット結成の少し前、ポジションがミドルブロッカーからオポジット（攻撃のみに専念する選手。別名スーパーエース）に変わった。エースポジションに抜擢され、嬉しいと同時に日本を背負う重圧を感じているに違いない。

まだ伸び続けている身長は現在202センチ。中学までは野球少年だったが、身長の高さに目を付けた高校のバレーボール部顧問に勧誘されてバレーを始めた。その先生が本学出身だったことから、高校生の頃から本学の練習に参加していたという。

「先輩方は礼儀正しい方ばかりで、自分にも優しくしていただきましたので、とてもいい印象を受けました。練習の厳しさにはすごく驚きましたけど。でも、それで勝っているという実績がありますし、忍耐力や人間力も付くと思って進学しました。（本学に）入って、本当によかった。他の大学では、監督の指示通りにプレーしなきゃいけなかったりするんですが、筑波大学は自分でアイデアを出してプレーできるところが、自分に合っています」

本学男子バレーボール部は、2015年度全日本大学選手権大会（インカレ）準優勝という結果を残した。次こそ優勝だ。

「リオ五輪出場以上に、インカレを獲るというのが目標。今年は、絶対に自分の力で優勝させるんだという気持ちで頑張っています！」力のこもった言葉に、試合中に見せる”熱い男”を垣間見た。

競技成績・各種発表・コンテスト結果

■男子ハンドボール部
第17回男子アジアハンドボール選手権
銅メダル　徳田新之介（体育2）

■オリエンテーリング部
第1回アジア・ジュニアユースオリエンテーリング選手権大会
［Mixリレー］金メダル　Japan2チーム　鈴木直美（地球2年）
2015年度日本学生オリエンテーリング選手権大会　ミドル・ディスタンス競技
［男子新人クラス1］2位　楠健志（地球1年）

■水泳部
東京都新春水泳競技大会
［男子200m背泳ぎ］優勝　金子雅紀（院2年）短水路日本新記録
2016 Perth Aquatic Super Series　3ヶ国対抗戦
［男子200mメドレーリレー］優勝　1泳：金子雅紀　日本新記録
第39回茨城県短水路選手権水泳競技大会　優勝者
［男子］［1500㍍自由形］斉藤匠海（体専2年）　［50㍍自由形］甫本研太（体専3年）
［100・200㍍自由形］三浦遼（体専2年）　［50・100㍍背泳ぎ］陣ヶ岡胤（体専2年）
［50㍍平泳ぎ］大久保琳太郎（体専1年）　［50㍍バタフライ］安藤一歩（体専3年）
［100㍍バタフライ］浦瑠一朗（体専3年）　［400・200㍍個人メドレー］山田泰也（体専1年）
［400㍍リレー］三浦、瀬戸吟次（体専3年）、石井亨（体専3年）、浦
［400㍍メドレーリレー］陣ヶ岡、大久保、浦、三浦
［女子］［200・400㍍自由形］大西綾香（体専2年）　［50・100㍍自由形］市川夏波（体専3年）
［50・100㍍背泳ぎ］西脇怜奈（体専1年）　［50㍍バタフライ］富田奈緒美（体専2年）
［400㍍リレー］市川、平山友貴奈（体専2年）、岡野圭穂（体専1年）、大西
［400㍍メドレーリレー］西脇、松竹涼子（体専3年）、平山、市川

筑波大生 大学新聞コンテストで最優秀賞！

「筑波大学新聞」※1が、「2015年第5回大学新聞コンテスト」※2の一般新聞部門において、「連載賞」1位、「記事賞」2位を獲得し、総合的に評価される「朝日新聞社賞」（最優秀賞）に輝いた。

「連載賞」1位を獲得したのは、「つくばに街灯を」という連載。警察担当の鈴木拓也さん（人文学類4年）が、「大学周辺の街灯のない道で女子学生へのわいせつ事件が急増している」という情報をキャッチ。市役所担当の平嶋健人さん（社会学類4年）らと、2013年12月から「つくばに街灯を」キャンペーンを開始し、関係機関の取り組み、現地調査報告、筑波大生400人へのアンケート、被害女性の声などを報じた。その結果、キャンペーン開始からわずか1年後、指摘した場所に、つくば市が13本の街灯を設置。さらには、街灯問題の解決を目指す「協議会」も発足させた。受賞は、その多角的な報道と大学新聞が行政を動かした点が評価されてのことだ。「自分たちの新聞が社会を動かしたということが実感できた」と鈴木さん。この素晴らしい経験が彼の進路を決定付け、4月から毎日新聞社の記者として歩み出す。

「記事賞」2位を獲得したのは、「自転車交通違反に関する記事（5人に1人が交通違反）」。大学周辺の道路で5,000人近くを対象に自転車の通行状況を定点調査したり、違反者に直撃取材するなどして、筑波大生の自転車運転の現状を明らかにしたものだ。この特集を企画した新田萌夏さん（社会学類3年）と油布知夏さん（人文学類3年）を中心に、定点観測にはたくさんの部員が協力した。

表彰式に参列した新田さんは、「朝日新聞社のデスク担当の人たちに、『ただの広報活動でなく、自分たちが調べた結果を発信するという姿勢がいい』と高く評価されたことが嬉しい」と喜ぶ。

この記事は、「つくば中央警察署の業務運営および交通安全活動に貢献した」と、つくば中央警察署長から感謝状も贈呈された。

「筑波大学新聞は、地域の皆さんにも読んでいただくことを念頭においた地域紙を目指している。今まで取り組んできた問題の進捗にも注目していきたいし、これからもいろいろな問題提起をしていきたい」と、編集長の田中開さん（教育学類2年）。「（編集部は）みんなで1つの紙面を作ろうという団結力があって、すごくいい雰囲気。ぜひたくさんの新入生に加わってほしい」。最後は熱烈アピールで締めくくった。

新入部員募集中！

※1筑波大学新聞：筑波大学新聞編集部が作成する大学公認の新聞。現在編集部員は25人ほどで、男女比はほぼ半々。発行は年7回（4・5・7・9・10・12・1月）。発行部数21000部。各エリア支援室や図書館、書籍部など本学の各所やつくば市内、各研究機関などで無料配布している。
- 新入部員募集中（連絡先／shinbun@un.tsukuba.ac.jp）
- 本学HPより閲覧可能　（https://www.tsukuba.ac.jp/public/newspaper/shinbunindex.html）

※2大学新聞コンテスト：東京五大学新聞連盟・関東学生連盟主催、朝日新聞社・日刊スポーツ新聞社特別後援。大学生が発行する優秀な新聞を選ぶコンテストで、2001年からスポーツ新聞を対象に開催されており、一般新聞部門の開催は今回が初めて。同点首位で一橋新聞部も最優秀賞に選ばれている。

■スキー部
第36回全日本スキー選手権大会フリースタイル競技
［デュアルモーグル］3位 尾登可南太（エシス1年）

■柔道部
平成28年全国体育系学生柔道体重別選手権大会
［男子81キロ級］優勝 山本幸紀（体専3年）
準優勝 小原弘暉（体育1）
平成28年茨城県柔道選手権
［男子］優勝　小林悠輔（体専4年）
準優勝　尾原琢仁（体専3年）
［女子］優勝　藤原恵美（体専3年）
準優勝　能智亜衣美（体専2年）
平成28年関東柔道選手権
［女子］準優勝　藤原恵美

■バドミントン部
第1回日本障害者バドミントン選手権大会
［男子シングルス］優勝　［男子ダブルス］第3位　藤原大輔（体専4年）

■卓球部
天皇杯・皇后杯　平成27年度　全日本卓球選手権大会
［混合ダブルス］ベスト8　坪井勇磨（体育1）
ベスト8　片岡弘紀（体育2）

※学年は2016年3月現在

以友学校

清渓川（チョンゲチョン）

東大門

南大門内部

教育改革を目指す学校で

中学・高校と、「以友学校」というちょっと特殊な学校に通っていました。「大学受験を目指し、小さい頃から塾に通って知識を詰め込むという教育には、ちょっと問題があるのではないか」と考えた人たちが集まって作った学校で、塾通いは原則禁止、いろいろな体験学習が行われます。体験学習では、畑の仕事をしたり、動物を育てたり、ボランティア活動をしたりしました。

年1回は、フィールドワークに出掛けました。楽しかったのは、済州道（チェジュトウ）自転車一周です。私は自転車が好きだったので、友人と3人でこの企画を考え、企画が採択されて、引率の先生1人と生徒13人で出かけました。フィールドワークの内容はとても自由で「自分たちで企画を立て、実行することが重要」と言われていました。

済州道は、ソウルから飛行機を使うと1時間程度で行ける島ですが、その時は、自転車を運ぶため、仁川（インチョン）からフェリーで13時間かけて行きました。遊ぶところがたくさんあるし、海がきれいで、魚も、豚もおいしい。山登りしたり、船で沖に出て釣りをしたり、馬に乗ったり…いろいろな楽しみ方ができる島です。

また別の年に行った釜山（プサン）も海のきれいな、いいところでした。この時は、KTX（韓国高速鉄道）で行きました。7人くらいのグループに分かれて計画を立て、宿泊施設の予約などの準備をし、予算の管理をしながら3泊の旅行をするというフィールドワークでした。決まっているのは、出発地点と集合地点だけで、国内の好きなところを、好きなテーマで旅行します。3日の間に1度は先生のチェックを受ける決まりがあるので、先生方はあちこち飛び回って大変そうでした。一学年70人くらいの学校だからできることでしょうね。

海外に1週間くらい滞在する海外フィールドワークもありました。私は、その時初めて日本に来ました。今振り返るといい学校だったなと思います。たまに帰省すると、必ず遊びに行くんですよ。

いつでもキムチ

韓国というと、キムチをよく食べるというイメージがありますが、実際、いろいろなものをキムチと一緒に食べますね。焼肉の時には、キムチも焼いて食べます。焼き芋とキムチとか…。日本人には驚かれますが、よく合いますよ。唐辛子を全く入れず、汁を多めにして作る「白キムチ」も、さっぱりしたスープのようでおいしいです。

今一番食べたいのは、カニの醤油漬け（ケジャン）。ワタリガニを、醤油ベースのタレに漬けて熟成させたもので、これが、めちゃくちゃおいしい。産卵シーズン直前の5～6月が一番おいしいと言われています。それから、ジャージャー麺も大好きな料理です。ジャガイモやタマネギ、豚肉などを炒め、中華味噌で味付けしたソースを麺と混ぜて食べる韓国式中華料理です。

飛行機で2、3時間ですから、ぜひ、本場の味を食べに行って下さい。

※学年は2016年3月現在

済州道（チェジュトウ）

ソウル駅

南大門

Homeland

本学には、100を超える国から、約3千人の留学生が訪れています。
このコーナーでは、本学の留学生から、出身国の自慢の場所や風景、
食べ物など、多岐にわたって紹介していただきます。

大韓民国

ジャン・ソウォン
Jang Seowon さん

所属：数理物質研究科 物理学専攻 博士前期1年
趣味：ジグソーパズル

ソウル首都圏に人口のおよそ半数が集中

私は高校生まで京畿道（キョンギド）で過ごし、私費外国人留学生入試を受験して、筑波大学に進学しました。

自宅からソウルまではバスで20分くらい。私の家もそうですが、ソウル周辺に人口がものすごく集中していて、5千万人の人口のうち、おおよそ半数が、ソウル首都圏に居住していると聞いています。

ソウルの気候は、日本の北海道と同じくらいで、冬には、マイナス10度くらいまで下がります。でも、雪はあまり降らず、積もっても30センチくらい。地震がほとんどないから発達したのだと思いますが、どの家にもお湯を床下に流して部屋を暖めるオンドルがあります。家の中はとても暖かく、半袖で生活する人もいるほど。夏は、30度以上になることもありますが、湿度がないので爽やかです。

ソウルは、王宮を囲む城壁都市でした。かつての出入り口だった南大門、東大門は、観光名所になっています。南大門から王宮の周りを散策するのが一般的な観光コースのようですが、ちょっと頑張って、南大門からソウル最大の繁華街、明洞（ミョンドン）を通って東大門まで散策すると楽しいですよ。もし途中で疲れたら、タクシーを使ってください。初乗りが300円くらいなので、気軽に利用できます。

ソウルの中心を流れる人工河川、清渓川（チョンゲチョン）に沿って散策するのもお勧めです。11月には、この川に明かりを灯すお祭り「ソウルランタンフェスティバル」が開かれます。

明洞（ミョンドン）

芸術の街大学路（テハンロ）

韓国式カラアゲ

ジャージャー麺

カフェの様子

TOPICS

200ｍ背泳ぎで短水路日本新記録を樹立！

1月17日に行われた東京都新春水泳競技大会で、金子雅紀選手（人間総合科学研究科 体育学専攻 博士前期2年）が、男子200ｍ背泳ぎで1分48秒25の短水路日本新記録を樹立しました。

181cmの大きな体から繰り出すパワフルなバサロキックが持ち味の金子選手。この大会では、100ｍ背泳ぎ、400ｍ個人メドレーと、出場した3種目全てで自己ベストを更新しました。昨年、日本、カタール、ＵＡＥで行われたFINAワールドカップでも、ドバイ大会（ＵＡＥ）200ｍ背泳ぎ銀メダルを含む6つのメダルを獲得しており、4月に行われるオリンピック選考会に向けて、順調に強化が進んでいます。

写真：Insidefoto/アフロ
FINAワールドカップドバイ大会

写真：Insidefoto/アフロ　FINAワールドカップドバイ大会

リュブリャーナ大学学長一行とスロベニア共和国駐日大使および駐日ベラルーシ共和国特命全権大使一行が表敬訪問

▲リュブリャーナ大学学長一行とスロベニア共和国駐日大使との集合写真

▲ 駐日ベラルーシ共和国特命全権大使一行との集合写真

▲ 大使・学長一行は、体育総合実験棟（SPEC）、藻類バイオマスエネルギーシステム開発研究センター、大学会館ギャラリー、附属中央図書館およびエンパワースタジオを視察

2月4日に、スロベニア共和国リュブリャーナ大学イヴァン・スヴェトリク学長およびシモナ・レスコヴァル駐日スロベニア大使らが、永田恭介学長、ベントン・キャロライン・ファーン副学長（国際担当）を表敬訪問され、和やかに懇談されました。

表敬後、リュブリャーナ大学から教員12人、本学から教員14人が参加し、両大学のさまざまな研究分野の紹介や、博士課程リーディングプログラムに在籍するスロベニアからの留学生によるエンパワーメント情報学プログラムについての紹介などが行われ、大学間交流協定を締結している同大学とのコラボレーションの実施に向けて、意見交換を行いました。リュブリャーナ大学とは、戦略的･包括的パートナーシップを形成し、今後、よりいっそうの人材育成および研究力推進向上を行います。

また、2月18日には、駐日ベラルーシ共和国ゼルゲイ・ラフマノフ特命全権大使が表敬訪問されました。懇談の席上、ラフマノフ大使から、本学のベラルーシ共和国に対する理解と協力に関して謝意が述べられるとともに、ベラルーシにおける教育や経済等の取り組みに関して説明があり、今後の連携協力に対する期待が述べられました。

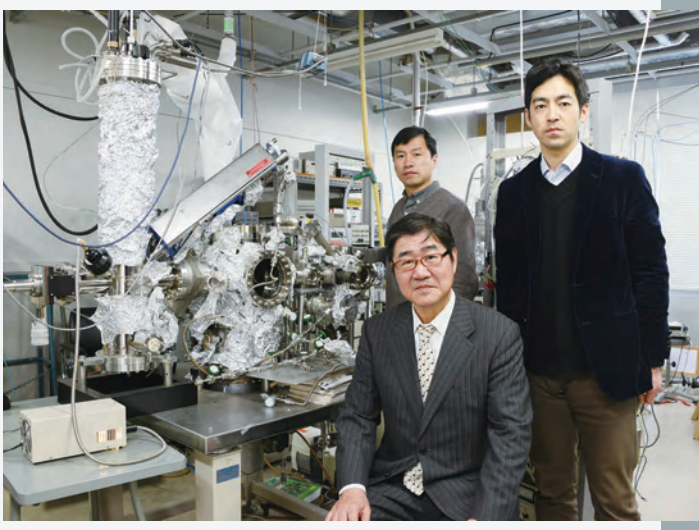
この度の大使のご訪問は、大学の世界展開力強化事業（ロシア）で計画していた特別講演会に合わせてのもので、懇談終了後、「ベラルーシを取り巻く現状と日本との関係について」との題目でご講演いただきました。

レアメタル白金に代わる燃料電池触媒開発につながる成果を発表！

数理物質系の中村潤児教授、近藤剛弘准教授、郭東輝研究員らは、レアメタルの白金に代わる燃料電池炭素触媒の活性点を形成する窒素種を特定し、サイエンス誌に発表しました。

燃料電池は水素と酸素から水を生成する際に生じるエネルギーを電気として取り出す発電装置です。発電時に温室効果ガスの二酸化炭素や有毒ガスを排出せず、化石燃料を燃焼させる従来の発電システムに比べて発電効率が高いなどの優れた特徴をもっています。しかし、燃料電池の化学反応を促進する触媒材料として、高価で希少なレアメタルである白金を使用していることが、燃料電池の普及を妨げる要因の一つとなっています。

中村教授らの研究グループは、白金に代わる安価で豊富な材料として炭素材料に着目しました。これまで、炭素材料に窒素原子を導入すると白金触媒に代わりうる炭素触媒（窒素ドープ炭素触媒）が実現できる可能性が知られていました。ただし、触媒機能をもたらす部位（触媒活性点）が未解明であることから、性能が白金触媒に匹敵する炭素触媒の開発が遅れていました。中村教授らは、今回、窒素ドープ炭素触媒の活性点を形成する窒素種（ピリジン型窒素）を特定することに成功しました。この発見により、炭素触媒を設計するにあたってはピリジン型窒素を適宜導入するという指針が明確になりました。今後、高価で希少な白金に代わる燃料電池触媒の開発が加速され、燃料電池の本格普及が早まるものと期待されます。



▲（手前）中村潤児教授　（左）郭東輝研究員　（右）近藤剛弘准教授

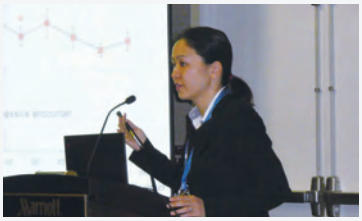
AAAS（アメリカ科学振興協会）2016年次総会参加

本学は、海外の研究関係機関とのネットワーク構築を目指して、2月11～15日、ワシントンDCにて行われたAAAS2016年次総会に参加し、ブース出展と北海道大学と共同での講演会などを行いました。このイベントは、サイエンス誌の発行元であるアメリカ科学振興協会が毎年行っているもので、世界中から研究者、エンジニア、教員、ジャーナリストら約5000人の参加者を集めるサイエンスコミュニケーションの祭典です。

ブースには、三谷純教授（システム情報系）提供の型紙から作成した立体折り紙を来場者と作る体験コーナーを設置し、コンピュータグラフィックによるバーチャルな造形物を折り紙で具現化するという技術研究を紹介しました。1枚の紙から球体ができる工程は大変注目を集め、本学の研究や国際的な取り組みなどを世界に紹介するよいきっかけになりました。

また、講演会では、「神経科学と数学の合わせ技による心の動きの解明:攻撃的行動から経済判断まで」のテーマの下、国際テニュアトラック教員の高橋阿貴助教（人間系）や岡本正洋助教（体育系）らが発表を行いました。

▲「Family Science Day」のブース内体験コーナーの様子



▲高橋阿貴助教（人間系）

▲岡本正洋助教（体育系）

※学年・所属は2016年3月現在

TOPICS

第１回なないろ駅伝大会開催

２月24日、陸上競技場にて、年齢や国籍、性別、宗教、障害の差を越えてタスキをつなぐ第１回なないろ駅伝を開催しました。

オリンピック・パラリンピックには、７つの「価値」（卓越、友情、敬意／尊重、決断、勇気、平等、鼓舞）があります。同大会は、これらの価値を世界中全ての人に伝え、後世につないでいくため、７つの価値を７色で表現した、７色対抗の駅伝を企画したものです。

当日、小学生の部では、春日学園４年生198人が男女各２組の計４組に分かれ、７色のＴシャツを着て１km競走をし、７色対抗で総合順位を競いました。

続くリレーマラソンの部では、春日学園７年生125人、外務省より招待されたブラジル人トップランナー、本学陸上部の長距離選手、アダプティブアスリート、本学一般学生・教職員、一般市民ランナーが９～10人が１チームとなり、計21チーム（１色３チーム×７色）が90分間で走った「距離」を競いました。

また、小学生アクティビティの部では、さまざまな教育プログラムも実施され、７色に込められた「価値」を楽しく学びました。

「がまじゃんぱー」が図書館キャラクターGP 日本一！

附属図書館公式キャラクター「がまじゃんぱー」が、「図書館キャラター・グランプリ」で、「館の働き者」部門のグランプリと審査委員会賞をＷ受賞しました。

同グランプリは今回初めて開催されたもので、「館の働き者」部門、「見た目で勝負」部門、「図書館サポート」部門の３部門が設けられ、エントリー総数は146組。がまじゃんぱーは、「館の働き者」部門の初代グランプリに輝くとともに、審査委員会からも「知名度を活かした縦横無尽の働きぶりには感服」「10年にわたって積極的な活動をしてきた」との高い評価を得て、審査委員会賞を受賞しました。

2006年に誕生したがまじゃんぱーは、図書館の広報物、講習会でのスライドやプロモーションビデオ、SNSなどさまざまな媒体を通じて活躍し、附属図書館の広報活動に貢献しています。また、附属図書館と図書館情報メディア研究科の宇陀・松村研究室との共催による学園祭企画にも毎年登場し、学生や一般の来場者に親しまれています。

今回の受賞を機に、がまじゃんぱーは、永田恭介学長を表敬訪問し、情報担当副学長でもある中山伸一附属図書館長と共に、来歴と受賞の報告をしました。

孔子像復元研究成果公開

3月5日～21日、湯島聖堂大成殿において芸術系の研究グループによる、孔子像復元研究の成果が一般公開されました。約2年をかけて行われた、関東大震災で焼失した湯島聖堂本尊孔子像に関する調査・考証および、それに基づいた孔子像の復元制作の最終報告としての公開展示です。

会場には、江戸期の画軸などを原型に、新たに彩色復元制作された等身大の孔子衮冕倚像（こんべんいぞう）の乾漆像を中心に、現在、湯島聖堂に祀られているブロンズ製の孔子像と同じ型で制作された乾漆像に、造像当時に施されていたと考えられる彩色を試みた座像、さらに、復元にあたって彩色の図柄等をシミュレーションした3次元コンピュータグラフィックス、復元研究の過程等を紹介するパネルが展示されました。

訪れた人々は、長い時間と多くの研究者の手を経て現代によみがえった孔子像を興味深く鑑賞しました。

▲孔子衮冕倚像の乾漆像

孔子衮冕倚像の解説をする藤田志朗教授（芸術系）▶

解説を聞きながら孔子像を鑑賞する来訪者の様子▶

Satellite Report 2016 ｜ 筑波大学サテライトオフィスから

ＴＸつくば駅前の複合商業施設「BiViつくば」2階にある「筑波大学サテライトオフィス」では、「つくば総合インフォメーションセンター（つくば市）」との一体的な空間を活用して、教職員や学生によるさまざまなイベントを開催し、本学の研究教育成果を発信するとともに、社会や地域との交流を図っております。本コーナーでは、1月～3月に開催されたイベントを紹介いたします。

■ バイオｅカフェ（生命環境サイエンスカフェ）

「昆虫体内のミクロな戦い～昆虫免疫はどのようにして病原体に打ち勝つか～」
話題提供者：古川誠一准教授（生命環境系 応用動物昆虫学研究室）
（1月13日）

■ バイオｅカフェ（生命環境サイエンスカフェ）

「新しい花をつくる」
話題提供者：小野道之准教授（生命環境系 遺伝子実験センター）（2月2日）

■ みんラボカフェ

「シニアが活躍できる社会をつくる」～シニアが働きやすい職業、働きにくい職業についての研究の紹介と、いつまでもいきいきと活躍できる社会をつくるためにはどうすればよいのかについて意見交換　講師：西山裕也氏（総合研究開発機構　主任研究員）
主催：みんなの使いやすさラボ（人間系 心理学域）（1月19日）

■ インド文化週間の１企画

民族衣装の展示、インドのスナック試食、インドからの留学生による文化・故郷紹介、ヨガレクチャーなど（1月23日）

■ 哲学カフェ「ソクラテス・サンバ・カフェ」

すべての市民とともにあらゆる問題について考えをシェアし哲学的に考察する　主催：人文社会系 哲学・思想専攻（1月24日）

■ めずらしい植物展

筑波実験植物園の「めずらしい」植物およびそれらを紹介するパネルを展示し、植物および植物園をつくばで暮らす人々にとってより身近なものとすることを目的として開催　企画：ADP（筑波大学アート・デザイン・プロデュース演習）ぶらんた15（2月5日～12日）

■ 気象サイエンスカフェ

最新のエルニーニョの動向について　第２弾
演者：前田修平氏（気象研究所気候研究部室長）
（2月19日）

■ Tsukuba for 3.11 写真展
「～5年目の3月11日14時46分～」

東日本大震災の復興支援活動を行っている本学学生団体「Tsukuba for 3.11」が、活動を通して見たもの、感じたことを、写真を通して多くの人々に伝えることを目的として開催
主催：Tsukuba for 3.11（東日本大震災の被災地復興・被災者支援のための本学学生団体）
（3月8日～13日）

■ 平成27年度下半期つくばアクションプロジェクト活動報告会

学生の優れた「つくばアクションプロジェクト」の活動に対し、T-ＡＣＴ推進室でノミネートした企画による活動報告を実施、投票で受賞企画を選出、各賞を決定し表彰。併せてT-ＡＣＴボランティアの活動報告会も　主催：T-ACT（つくばアクションプロジェクト）（3月28日）

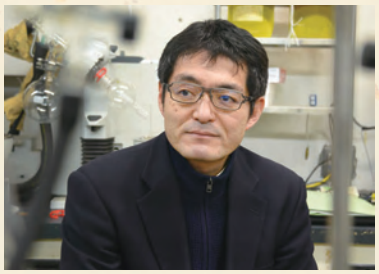
受賞
Award and Prizes

受賞名	受賞者（所属・学年）	指導教員
独立行政法人日本学術振興会 科学研究費補助金第1段審査表彰	小島隆彦教授（数理物質系）	――
	神原貴樹教授（数理物質系 学際物質科学研究センター）	――
	牧村哲也准教授（数理物質系）	――
	堤盛人教授（システム情報系）	――
	黒田乃生教授（芸術系）	――
BCSJ Award	桑原純平講師 （数理物質系 学際物質科学研究センター） 神原貴樹教授 （数理物質系 学際物質科学研究センター） 熊田達也 （数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻 博士前期2015年修了） 野原雄太 （数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻 博士前期2014年修了）	――
Plant Species Biology Best Paper Award 2015	山路恵子准教授（生命環境系）	――
日本スポーツマネジメント学会奨励賞	仲澤眞准教授（体育系）	――
SAT テクノロジー・ショーケース2016 総合得点賞	大城幸雄講師（医学医療系）	――
第45回日本神経放射線学会 加藤賞	増田洋亮病院講師	
2015年度日本データベース学会 若手功労賞	天笠俊之准教授（システム情報系 計算科学研究センター）	――
平成27年度第19回 丸文研究奨励賞	所裕子准教授（数理物質系）	――
富士箱根伊豆国立公園指定80周年記念功労者表彰	上條隆志教授（生命環境系）	――

▼「独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金第１段審査表彰」

小島隆彦教授（左）と堤盛人教授

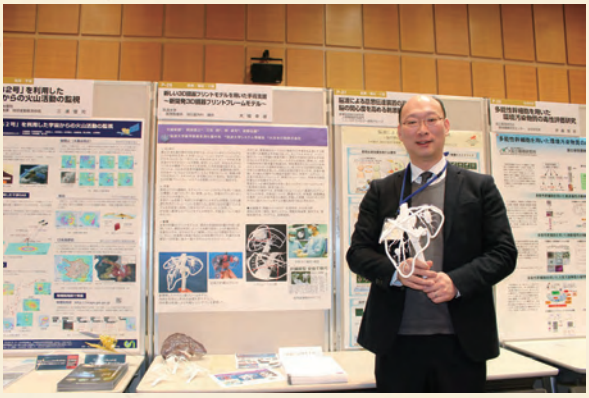
牧村哲也准教授



神原貴樹教授

黒田乃生教授

▼「SAT テクノロジー・ショーケース2016　総合得点賞」



大城幸雄講師

◀「第45回 日本神経放射線学会 加藤賞」

増田洋亮病院講師（左）

受賞名	受賞者（所属・学年）	指導教員
大学生観光まちづくりコンテスト2015 大阪商工会議所賞	鈴木哲平（社会・国際学群 国際総合学類2年） 上野大樹（社会・国際学群 国際総合学類2年） 馬場麻佑花（社会・国際学群 国際総合学類2年） Pedro Couteiro（社会・国際学群 国際総合学類2年） 松本大亮（社会・国際学群国際 総合学類2年） 谷口由希子（社会・国際学群 国際総合学類2年） 田邊高徳（社会・国際学群 国際総合学類2年） 浅井晶子（社会・国際学群 国際総合学類1年） 河合晃太郎（社会・国際学群 国際総合学類1年）	呉羽正昭教授（生命環境系）
日本宇宙生物科学会第29回大会 優秀賞	木村駿太（生命環境科学研究科 生物資源科学専攻 博士前期2年）	横谷（富田）香織講師（生命環境系）
The American Ceramic Society, Ceramographic Competition Award	牧涼介 （数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻 博士後期2年）	鈴木義和准教授（数理物質系）
第67回日本化学生物工学会セルプロセッシング計測評価研究部会 優秀学生発表賞	赤塚愛里 （生命環境科学研究科 生物資源科学専攻 博士前期1年）	王碧昭教授 （生命環境系 遺伝子実験センター）
国立民族学博物館 第7回みんぱく若手セミナー賞	柴田香奈子 （人文社会科学研究科 文芸・言語専攻 一貫制博士4年）	伊藤眞副学長
Best Presentation Prize International Conference of Emotion and Sensibility	Ji Wang （人間総合科学研究科 感性認知脳科学専攻 博士前期1年）	李昇姫准教授（芸術系）
Gold Prize Taiwan International Student Design Competition	Choi O Kyu（芸術専門学群4年）	李昇姫准教授（芸術系）
第12回茨城地区分析技術交流会 優秀ポスター賞	新井香裕 （システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻博士前期2年）	阿部豊教授（システム情報系） 金子暁子准教授（システム情報系） 金川哲也助教（システム情報系）
T.J. Tarn Best Paper in Robotics Award	村田耕一 （グローバル教育院 エンパワーメント情報学プログラム 一貫制博士4年）	山海嘉之教授 （システム情報系 サイバニクス研究センター長） 河本浩明准教（システム情報系） 松下明助教（サイバニクス研究センター） 五月女康作研究員（サイバニクス研究センター）
SAT テクノロジー・ショーケース2016 ベスト研究交流賞	井上裕三（理工学群 工学システム学類4年）	阿部豊教授（システム情報系） 金子暁子准教授（システム情報系） 金川哲也助教（システム情報系）
DEIM2016 優秀インタラクティブ賞	久保遥（情報学群 知識情報・図書館学類4年）	関洋平准教授（図書館情報メディア系）
DEIM2016 学生プレゼンテーション賞	長島里奈（情報学群 知識情報・図書館学類4年）	関洋平准教授（図書館情報メディア系）
情報処理学会 第78回全国大会 学生奨励賞	佐藤朋美（情報学群 知識情報・図書館学類4年）	関洋平准教授（図書館情報メディア系）

▼「第12回茨城地区分析技術交流会　優秀ポスター賞」

新井香裕さん（左）
と阿部豊教授

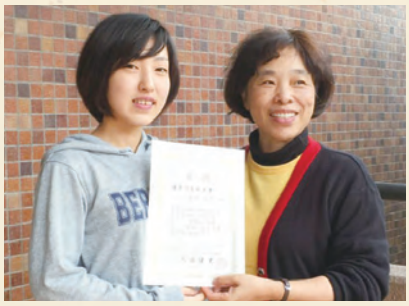
▼「2015年度日本データベース学会若手功労賞」

天笠俊之准教授

▼「富士箱根伊豆国立公園指定80周年記念功労者表彰」

上條隆志教授

▼「第67回日本化学生物工学会
セルプロセッシング計測評価研究部会　優秀学生発表賞」

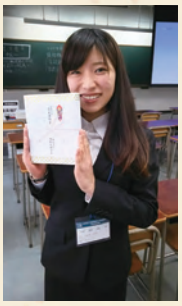


赤塚愛里さん（左）
と王碧昭教授

▼「SAT テクノロジー・ショーケース2016　ベスト研究交流賞」

井上裕三さん

▼「情報処理学会 第78回全国大会 学生奨励賞」



佐藤朋美さん

※所属・職名・学年は受賞時

筑波大学校友会

TAA: University of Tsukuba Alumni Association

筑波大学台湾校友会発足式を開催

2016年2月20日、台北市にて筑波大学台湾校友会発足式が行われました。発足式には、現地の約60名の同窓生と、筑波大学からは永田恭介学長ほか計22名が参加しました。台湾校友会初代会長には、国立台湾体育運動大学の林華韋学長（1989年 体育学修士）が就任し、合わせて、潘進丁副会長（1985年 経営政策修士、現・台湾ファミリーマート会長）、邱若山副会長（1992年 文芸言語研究科修了、現・静宜大学准教授）、李嘉進顧問（2014年 国際日本研究博士、現・亜東関係協会会長）、陳碧涵事務局長（1989年 舞踏方法学修士、現・国立台湾戯曲学院准教授）の就任が承認されました。また、総会出席者との議論のうえ会則が成立しました。

第2部は「筑波大学を共有する」と題し、永田学長の祝辞に続いて、御澤真一郎氏（2009年 人文学類卒）、李柏旻氏（2004年 農林工学博士）、邱若山氏（1992年 文芸言語研究科修了）による筑波大学での思い出「筑波大学今昔物語」の発表、ベントン・キャロライン・ファーン副学長による筑波大学の現在から未来に向けた活動「筑波大学未来物語」の紹介などがありました。

続いての懇親会では、台湾にある13の本学協定校から来賓を迎え、それぞれからご挨拶をいただき、盛大に執り行われました。

懇親会での筑波大学台湾校友会の林華韋会長と永田恭介学長

筑波大学台湾校友会の会長（中央）、副会長（手前２名）、顧問（中央奥）、事務局長（一番奥）

台湾校友会発足式会場の様子

紫峰会（筑波大学学生後援会）の事業を本学に移行

紫峰会（筑波大学学生後援会）は、昭和52年に学生の課外活動や学生生活の支援を主たる目的にして在学生の保護者を中心に設立され、これまで大きな成果を挙げてきましたが、平成28年度からは、紫峰会の役割・機能（学生に対しての課外活動助成事業、学生生活支援事業、広報普及事業）を本学が運営する筑波大学紫峰会基金【筑波大学学生支援事業】として、発展的に移行することになりました。

今後は、紫峰会の精神を受け継ぎ、本学学生の多くが参加する課外活動や学生生活の支援等が永続的かつきめ細やかに継続され、本学の大きな特長である学生の主体的・能動的な学習への学生本位の視点による支援が更に活性化されることを企図しておりますので、従前以上のご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

なお、紫峰会基金にご協力いただいた方には、「寄附金受領証明書」を発行いたしますので、確定申告することにより税制上の優遇措置が受けられます。また、今までの紫峰会会員への各種サービスは移行後もほぼ継続されるとともに、希望する方には、校友会SNSのユーザIDと、パスワードを発行します。

茗 渓 会

MEIKEIKAI ／ 筑波大学同窓会を母体とする一般社団法人

茗渓会賞

平成27年11月28日、大学会館において「茗渓会賞（社会貢献活動功労者）」の顕彰式が行われました。茗渓会賞には、社会貢献活動2部門（一般功労者部門、大学院生部門）と芸術部門がありますが、この日行われたのは社会貢献の一般功労者部門で、全国の地域茗渓会等から推薦のあった活動について顕彰されたものです。なお、残りの2部門については、今春の筑波大学修了生・卒業生を対象としています。

茗渓会に関する有識者懇談の会

平成28年2月6日、茗渓会館において「茗渓会に関する有識者懇談の会」が開催されました。この会は、今年度初めて設けられたもので、各界で活躍しておられる同窓の有識者の率直なご意見を伺い、茗渓会の運営に役立てようとするものです。今回のメンバーは、春成幸男氏、五十嵐耕一氏、小野清子氏、長瀬要石氏、渡辺好明氏と茗渓会理事長および役員で、茗渓会の現状や将来について貴重な意見交換が行われました。

大学との懇談会で卒業・修了祝賀会補助の目録贈呈

平成28年2月16日、大学本部管理棟5階大会議室において、「筑波大学と茗渓会との懇談会」が開催され、筑波大学の執行部、学群長、学類長と茗渓会執行部との意見交換が行われました。また、会の冒頭に、茗渓会から筑波大学へ目録（280万円）が贈呈されました。これは、茗渓会賞芸術部門および卒業・修了祝賀会への補助を内容とするものです。

01

体育系准教授

渡部 厚一 さん

茨城といえば広大な敷地を生かした農業県、食の宝庫ですね！季節の野菜・フルーツは加工せず素材の味を楽しめ、鶏卵生産量は全国1位、常陸牛も絶品です。海からはアンコウなどの珍味が味わえます。海外出張から帰ると、地産地消の食の文化を楽しんだりしています。米どころ故、煎餅や団子も然り。そこで、昨夏の鬼怒川の氾濫から約半年経過するも未だに苦しんでいる常総地区の復興を願い、2軒の和菓子屋を紹介したいと思います。「春子屋」と「ゆたかや」、名物お団子のライバル店です。茨城に移り約25年ですが最近まで気づきませんでした。甲乙つけがたいかな。ご家族等で味比べをして楽しんでみては？

NEXT 次回は、人間系准教授の山中克夫さんです。
『自治会運営や子供のスポーツで公私にわたりご近所付き合いさせていただき、刺激を受けています』

02

人文社会系准教授

菱川 邦俊 さん

世界各地から届く電波に耳を傾けるのが趣味で、余暇ができると短波放送の聞ける受信機の前にいます。小学生の頃、自宅にあったラジオのスイッチを入れて、偶然オーストラリアからの放送を聞いたのがきっかけではじめた趣味。自宅にいながら世界各地の今を知ることができ、気がつけば35年以上続いています。さまざまな放送を聞いては放送局に手紙を出して、個性豊かなデザインの受信確認証なるものを得ています。コレクションの中には今はなきソ連や東ドイツの放送局からの返信もあります。なかなかマイナーな趣味ですが、同じような趣味を楽しまれている方がいらっしゃいましたら、ぜひお声をお掛けください。

NEXT 次回は、人文社会エリア支援室の高澤南さんです。
『留学生の対応でいつも大変お世話になっています』

ツクバでツナガるリレー→エッセイ

05

システム情報系准教授

矢野 博明 さん

数年前に弟夫婦からもう使わないからと本格的なテントをもらったものの、しばらく物置にしまいっぱなしでした。筑波山でのお試しキャンプが意外に良く、これなら家族で安く旅行ができると味をしめて、昨年のお盆休みはキャンプ場を点々としながら北陸まで足を伸ばしました。その途中で利用した乗鞍高原のキャンプ場は、夜は周囲に明かりもなく恐怖を覚えるほど真っ暗。でも夜中に天の川を生まれて初めて肉眼で見た時は感動しました。カセットコンロで調理するなんちゃってキャンプですが、これからも折を見て出かけたいと思います。

NEXT 次回は、医療医学系講師の大城幸雄さんです。
『本学医工芸連携プロジェクトの頼れる兄貴かつコストコ仲間です』

06

東京キャンパス事務部学校支援課

市野塚 浩子 さん

運動が苦手な私にはめずらしくホットヨガを続けています。体が硬くてバランスポーズもふらついて、ヨガやってますなどと自慢できるものではなくお恥ずかしい限りですが、最近はチャレンジするコースもいろいろ増えて、ちょっと楽しくなってきました。（やった！）なんといっても、たくさん汗をかいてスッキリ気持ちいいし、血行も良くなってお肌にもいいし、お腹も多少へこんだ気が？そういえば風邪もひいてないですし、この一石二鳥のデトックス効果と爽快感にはまって、もうしばらくホットヨガ楽しめそうですね♪

NEXT 次回は、システム情報エリア支援室の辻芳江さんです。
『ホットヨガは彼女とはじめました。趣味をいろいろ楽しんでいてその行動力に感心しています。またいっしょにホットヨガやれることを楽しみに！』

03

体育系特任助教

金堀 哲也 さん

2015年9月に娘が生まれました。2500グラムとあまり大きくなく誕生して、立派に育ってくれるか不安でしたが、お母さんの母乳にくらいつき、すくすくと育ってくれました。3ヶ月検診では平均体重を上回り、最近は離乳食もはじまって、スプーンを奪って離しません。もうすぐ6ヶ月になりますが、最近は太りすぎでないかと心配するくらい、手も足もほっぺたもパンパンです。母乳だけで育っている子はすぐに痩せると聞くので、早くハイハイをはじめてほしいと期待するこの頃です。とはいっても初めての娘なので、焦らず慎重に成長を見守っていきたいと思います。

NEXT

次回は、医学医療系講師の岡本嘉一さんです。
『岡本先生は3年前に学童野球を通じて知り合った、子どもを想う気持ちは誰にも負けない熱い熱い先生です』

04

数理物質系准教授

坂口 綾 さん

“海賊”なんてONE PIECEの世界だと思っていました。ところが、少し前にシンガポールを出港しベンガル湾まで船旅をした時に、その存在を知りました。マラッカ海峡を抜ける辺りでしょうか、「海賊対策だ」と船員さんが鉄の水密で窓を完全に閉めきり、船の縁を通電しているロープで囲い、そして放水銃が両舷に設置されたのです。私は「来るところまで来てしまった」と覚悟を決めました。…結局海賊に襲われることも無く、無事に航海は続いた訳ですが、こんな状況に至った理由も長野の山奥深くで生まれ育ち、海への異常な憧れ、否、執着からです。「やっぱ海でしょ～」と、近年は研究対象にまでなりました。

筆者：中央

NEXT

次回は、生命環境系准教授の加藤弘亮さんです。
『優しく穏やかな風貌とは裏腹に内にアツイものを秘める、東京生まれ東京育ちのガチ“山男”です』

5000人を越す教職員がいる本学。
その中で生まれた人と人とのつながりを、8本のバトンが渡っていきます。

07

システム情報系助教

長谷部 浩二 さん

昨年、遅ればせながら結婚をし、新生活を楽しんでいます。妻も私も大の猫好き。「一緒に暮らすようになったら、猫を飼おうね」と言っていたところ、昨年末に同じマンションのご近所さんから野良猫を保護したと聞き、子猫を一匹譲り受けました。二人で相談してミミと名付けました。最初は子猫だったのが、数ヶ月であっという間に大きくなりました。いたずらが大好きで、カーテンによじ登ったり部屋中をかけ回ったりして叱られることも。でも仕事から帰って来ると、ドアにかけ寄ってきて甘えてきます。今はすっかり我が家の一員です！

NEXT

次回は、総務部情報化推進課学術情報メディアセンターの嶋田君枝さんです。
『教育クラウド室でお世話になっています。仕事もバリバリこなし華道もたしなむ、バイタリティあふれる方です』

08

社会人大学院等支援室

神原 清美 さん

現在の職場はシフト制で午後出勤の時は帰宅が遅くなります。帰ってから食事・入浴・深夜アニメを見て就寝という生活を続けていたら、当然のことながら太り、寝つきも悪くなりました。糖質制限ブームに便乗し、食事は炭水化物少なめ、タンパク質・食物繊維を積極的にとる生活を始めました。夕食に炭水化物はとらず、朝食は白米に玄米を加えています。野菜・肉・魚は量を気にせず積極的に食べています。糖質制限は賛否があるので、極端に実践し過ぎないよう気をつけています。継続力のない私にしてはめずらしく続けられており、少しずつ健康になっていると思いますので、長く続けていきたいと思います。

NEXT

次回は、生命環境エリア支援室の大場彩さんです。
『同期で同じ宿舎で、楽しい時間を過ごさせてもらいました。多趣味で好きなことに夢中になる姿が素敵です』

※所属・職名は2016年3月現在

Media Appearances

本学関係の主な新聞掲載・テレビ放送一覧（1月～3月）

新聞記事一覧

	記事内容	掲載本学関係者	掲載紙（掲載日）
1	本学芸術専門学群の学生らが、茨城県菓子工業組合のプロジェクトに参加	大川真紀（人間総合 芸術 博士前期1年）	毎日（1.1）
2	丹羽隆介准教授、深水昭吉教授らは、昆虫脱皮ホルモンの合成調節タンパク質「ウィジャボード（こっくりさん）」を発見したと発表	丹羽隆介准教授（生命環境系） 深水昭吉教授（生命環境系 生命領域学際研究センター）	常陽（1.7）
3	本学と三菱重工業、高エネルギー加速器研究機構などのグループは、共同でホウ素中性子捕捉療法「BNCT」に使用する加速器を開発。5年以内に附属病院への導入を目指す	附属病院	日経産業（1.13）
4	高木英樹教授らの研究グループは、クロールで速く泳ぐ腕の使い方を解明	高木英樹教授（体育系 体育センター）	朝日（1.13）　毎日（1.23）
5	征矢英昭教授とラクワール ランディープ教授の研究グループは、天然由来色素成分アスタキサンチンが、海馬の神経新生が濃度依存的に促進し、海馬が担う学習・記憶能力を高めることを明らかにした	征矢英昭教授（体育系） ラクワール ランディープ教授（体育系）	常陽（1.14）
6	附属図書館キャラクター「がまじゃんぱー」が、「第1回図書館キャラクターグランプリ」の「館の働き者」部門でグランプリと審査委員会賞をW受賞	斎藤未夏（附属図書館情報管理課） 石津朋之（附属図書館情報管理課） 嶋田晋（附属図書館情報サービス課）	常陽（1.21）
7	金子雅紀選手が、東京都新春水泳競技大会の男子200㍍背泳ぎで、短水路日本新記録を更新	金子雅紀（人間総合 体育 博士前期2年）	常陽（1.21）
8	ひと：「自殺予防について」太刀川弘和准教授	太刀川弘和准教授（医学医療系 保健管理センター）	常陽（1.21）
9	国立研究開発法人放射線医学総合研究所や松本正幸教授らは、共同研究により、神経発達障害「トゥレット障害」の奇声現象を解明	松本正幸教授（医学医療系）	日刊工業（1.21）
10	中村潤児教授、近藤剛弘准教授、郭東輝研究員らは、触媒活性点の窒素種特定	中村潤児教授（数理物質系 学際物質科学研究センター） 近藤剛弘准教授（数理物質系 学際物質科学研究センター） 郭東輝研究員（数理物質系）	日刊工業（1.22）
11	安倍晋三首相が、施政方針演説で、本学が「ロボットスーツ」を開発したことを紹介	ロボットスーツ	朝日・読売・日本経済（1.23）
12	「慢性E型肝炎について」大城幸雄講師	大城幸雄講師（医学医療系）	東京・茨城（1.24）
13	「中央社会保険医療協議会」は、医療機器「ロボットスーツHAL」の医療保険適用を了承	サイバーダイン	朝日・毎日・茨城（1.28） フジサンケイビジネスアイ・日刊工業（1.29）
14	本学は、新テストが導入される2020年度入試をめどに、入試見直し構想があることを発表		朝日（1.29）
15	自転車のアジア選手権女子スクラッチで、梶原悠未選手が優勝	梶原悠未（附属坂戸高校3年）	朝日（1.30）
16	学生限定のハッカー大会「SECCON」で、前田雄人さんがリーダーの「dodododo」が優勝	前田優人（情科2年） 「dodododo」	東京（1.31）
17	G7茨城・つくば科学技術大臣会合の公式プレイベントとして、本学とFMラジオ局が5月に「INNOVATION WORLD FESTA 2016」開催	永田恭介学長 山海嘉之教授（システム情報系 サイバニクス研究センター長） 落合陽一助教（図書館情報メディア系）	常陽（2.2） 日刊工業（2.29）
18	本学の2次試験出願状況～前年同期0.1ポイント増の4.2倍		朝日・茨城・東京・日本経済（2.4）
19	第5回大学新聞コンテストの一般新聞部門で、筑波大学新聞編集部が連載賞1位、記事賞2位、総合で最優秀賞の朝日新聞社賞を受賞	筑波大学新聞編集部 田中開（教育2年）	朝日（12.22）
20	本学蹴球部が創部120周年記念イベントを開催。田嶋幸三日本サッカー協会次期会長や鈴木淳同ナショナルトレセンコーチらによる討論会	蹴球部 中村覚之助（東京高等師範学校OB） 田嶋幸三（OB）　中山雅史（OB） 井原正巳（OB）　長谷川健太（OB） 風間八宏（OB）　鈴木淳（OB） 髙木謙（体専3年）　本橋銀太（地球3年） 横田伍（体専3年）　扇山直斗（社工2年）	毎日（2.17） 常陽（2.20、26） 読売・茨城（2.22） 茨城（3.1）
21	澁谷彰教授らは、死んだ細胞が免疫細胞を刺激して、炎症性腸疾患やアトピー性皮膚炎などの症状を悪化させると発表	澁谷彰教授（医学医療系 生命領域学際研究センター）	日経産業（2.17） 常陽（2.25）
22	常総市復興計画策定委員会（委員長：大澤義明教授）が復興計画案をまとめた	大澤義明教授（システム情報系）	朝日・東京・茨城（2.21）
23	高校野球日本代表主将の篠原涼選手が本学に進学	川村卓准教授（体育系 野球部監督）	朝日（2.23）
24	年齢や国籍、障害の差を越えてタスキをつなぐ、本学体育系主催の第1回なないろ駅伝が開催された	澤江幸則准教授（体育系） 海老原梓（人間総合 芸術 博士前期1年）	常陽（2.25）
25	本学で一般入試前期開始。本学には、4633人が出願、4495人が受験		読売・茨城・常陽（2.26）
26	日本サッカー協会は、アジア最終予選に望む日本女子代表20人を発表。熊谷紗希選手が選出された	熊谷紗希（体専4年 リヨン）	朝日・毎日・読売・日本経済・茨城（2.26）
27	柔道リオ五輪出場 永瀬貴規選手が当確	永瀬貴規（体専4年）	茨城（3.2）
28	漫才コンテストの結果を予測する人工知能を真榮城哲也准教授らが開発	真榮城哲也准教授（図書館情報メディア系 知的コミュニティ基盤研究センター）	読売（3.5）夕
29	本学と米学術情報調査会社のトムソン・ロイターが、体育・スポーツ科学分野で「教育」「研究」「競技」の3つの役割に分け、大学を評価する手法を開発。総合性で卓越した大学となったのは、本学とラフバラ大（英国）、カルガリー大（カナダ）	永田恭介学長	朝日（3.7）
30	本学で3月7日、一般入試前期日程の合格発表があり、9学群で1469人が合格		朝日・読売・茨城・常陽（3.8）

テレビ放送一覧

	内容	出演本学関係者	放送局・番組（放送日）
1	メディアアート作品を研究および制作している落合陽一助教を密着取材	落合陽一助教（図書館情報メディア系）	TBS系列 サンデージャポン（1.24）
2	世界の博物館に関して	渡辺政隆教授（広報室 サイエンスコミュニケーター）	テレビ朝日 林修の今でしょ！講座（3.15）

Event calendar

4 april

1日（金）　学年開始
　　春季休業（～6日）

7日（木）　入学式

8日（金）　新入生履修ガイダンス

11日（月）　新入生オリエンテーション（～12日）

13日（水）　春学期授業開始

20日（木）　TOEFL説明会
　　海外ボランティア説明会

23日（土）　科学技術週間「キッズ・ユニバーシティ」

5 may

14日（土）　春季スポーツ・デー（～15日）

18日（水）　TOEFL説明会
　　海外ボランティア説明会

22日（日）　筑波大学みどり散歩（国際植物の日）

27日（金）　第42回やどかり祭（～28日）

6 june

28日（火）　春ABモジュール期末試験（7/4）

TSUKUBA COMMUNICATIONS（筑波大学広報誌） VOL. 31
平成28年4月発行　編集・発行：筑波大学広報室
〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1
電話：029-853-2063　E-mail：kohositu@un.tsukuba.ac.jp
URL：http://www.tsukuba.ac.jp/
©2016筑波大学（本紙記事の無断転載を禁じます）